

こんにちは。佐藤タカヨシです。

小学4年の秋から高校までサッカーを、大学時代は仲間内でフットサルをやってきました。

ここでは私のフットボールヒストリーを時代ごとに紹介していきたいと思います。

少しでも私の事を知っていただければ嬉しいです。

## 小学校時代

もともとは野球をやろうと思っていたのですが、サッカースポーツ少年団がやっていた放課後の自主練がなんとも楽しそうで釣られてしまい、サッカーの道へ。(小4の秋)

割と運動は出来る方だと思っていたので、すぐ試合とか出れちゃうんじゃないかね?などと甘い考えで入ったのですが、もちろんそんなに甘くはありません。

なんせ入団当時の私の武器といえば唯ひとつ、トゥーキックのみでしたから。つま先で蹴るヤツですね。響き好きです、トゥーキック。

その武器も、同級生とのサッカーで、というよりはキックベース(サッカー野球?)で培われたものでした。

なので、まともにボールを扱えるはずもなく、既にサッカーを始めていた同学年のヤツらに敵うはずもありません。劣等感満載のスタートでした。

しかもそのうち2人はちょうまいんですよ。(4年生の時点で6年生中心のAチームでスタメンになってる。)Aチームでスタメンを張ってる同級生を後目に初心者グループ(主に下級生)で基礎練習にせさせと勤しむ自分。なんだか凄く恥ずかしかったのを覚えています。

下級生に混ざっての下積み時代を経て、来る5年生の春。

なんと私はAチームのスタメンに名を連ねる事が出来ました！

急ですね！この時はホントにびっくりしました。なんせいきなりのスタメンです。

今思えばですが、考えられる理由としては、

① そんなに人数がいなかった。

たぶん5・6年生合わせて25人位だったと思います。(下級生含めればもっといいましたが。)

② 希望ポジション被ってる人がそんなにいなかった。

希望はもちろんストライカー！！からの右ウイング。(一度目の挫折。親父の戦略的洗脳。詳しくは後程。)

③ でっかかった。

体格よかったですよ。当時でチーム1・2を争うデカさでした。

④ 足が速かった。

でっかいですからね。。運動神経もそこそこありました。(たぶん)

④ 積極的だった。

これは結構大きかったですね。周りが消極的だったのも結果的に後押しになったと思います。(積極的に「攻撃がいい！」とか言わないと守備をやらされるような傾向があった。)

こんなところですかね。

こんな感じで私はいい感じのスタートを切る事が出来ました。

ただ、さっきもちょっと書いたんですけど、もともとの希望はストライカーだったんです。

つまり、ポジションでいえばCF(センターフォワード)ですね。ゴールに一番近い場所において、「点を取る」事が主な役割のポジションです。

今の日本でいうところの「柿谷曜一朗や大迫勇也、豊田陽平、佐藤寿人」あたりですね。

しかし、これもさっき書いたと思うんですけど4年生の時点でAチームに入るようなちよーうまいヤツが2人いたんですね。

で、その内の1人がCFだったんですよ。敵う訳がないんですよ。今思えば。ラウールみたいなヤツでしたから。(ラウールは、元スペイン代表のストライカー。内田篤人選手とも昔チームメイトだった。)

なにが凄かって「嗅覚」があるんですよ。

ゴールの匂いを嗅ぎ取れるっていうんですかね？ どうすれば点を取れるのかが本能的にわかっていたんですよ、そいつ。

生まれ持った才能ってヤツです。かないっこありません。

しかし、積極的な小学生だった私はポジションを奪う気満々でした。

「かないっこない」なんて当時は思わなかったんですね。

でもそんな状況を全て把握している人物がいたんです。

それが、親父です。

親父はサッカーで判断しました。「敵う訳がない」と。

非情な親父です。息子をサッカーで見限りやがったんです。

ただ、どうすれば息子に悲しい現実を伝えずにモチベーションを維持させたまま、CFを諦めさせるかを彼はわかっていました。

名付けて、「耳打ち作戦」です。

親父は私に耳打ちしました。

父「点取るヤツが一番カッコイイと思ってるだろ？」

オレ「うん。」

父「実はな、違うんだよ。」

オレ「は？」

父「いいか、良く聞け。実はな、一番カッコイイのは点を取るヤツじゃない。

そいつにパスを出してやるヤツ、つまり「右ウイング」が一番カッコイイんだ！」

オレ「マジで？」

ちよろいもんです。

こうして私は自分でも知らず知らずのうちに挫折を経験しました。

「勘違い右ウイング」の完成です。

(※右ウイングは簡単に言うと主にセンタリングなどのラストパス、つまりアシストを担当する攻撃的なポジションです。漫画の「シュート」でいうこの平松君ですね。)

でも結果的に親父のこの作戦は大成功です。

その後、小学校を卒業するまで私は主に右ウイングを主戦場としてプレーしてきました。

もう途中からは右ウイングのおもしろさに憑りつかれ、どうやったらうまくラストパスを通せるか、ということばかりを追究するようになりました。

ほぼシュートなんてそっちのけですね。

アシストが楽しくて楽しくてしょうがありませんでした。

でも、これが結果的に自分のプレースタイルの幅を広げることになりました。

視野が広く保てるようになったんですね。

なぜなら、ラストパスを通すためには常に周りの状況を把握しておく必要があるからです。

詳しくはブログの記事でお伝えしていこうと思いますが、この視野を広く保つ意識を初心者頃から習慣づけていくということはとても大事なことで、頭の隅に入れておいていただけると嬉しいです。

結果的には、私の所属していたチームは地区大会では無敵を誇り、県大会でもベスト4という成績を収める事が出来ました。

## 中学時代

私が行った中学校は、私がいた小学校が最大派閥として構成されていた学校だったので、サッカー部もほとんどが私のいた小学校の顔なじみのメンバーで、他の小学校出身者から数人入るといった感じでした。（なんとなく補強っぽいですね。）

中学校のサッカー部は小学校のそれとは一線を画すものがありました。身体的にも成長期ですし、多少ではありましたが「戦術」も小学校のものよりはしっかりとしたものになっていました。

当時の私は子供ながらに「慣れるまでには時間が掛りそうだな。」と感じていましたが、そんな思いとは裏腹に私含め数人の新入生は早い段階から A チームに入る事になりました。

それぞれ A チームに入る理由はあったかと思いますが、私が入れた理由はまず間違いなく「体がデカかったから」です。

お得ですね、早めの成長期。ホントラッキーだったと思います。

まあ、別に田舎のただの市立中学なので、こんなもんだと思います。

でも所詮一年坊なので、大して上手いわけでもなく、たまの出場機会です。

秋の新人戦なんかでは割と出れるようにはなりましたが、トータルで見ればエリートでもなんでもないただ体がデカイがために送れたお得な一年だったと思います。

ただ、ひとつ大きな変化もあったんですね。

それが「システムの変化」です。

小学校時代はマンガの「シュート」と全く同じの「4-3-3」だったんですが、中学校になるとよりバランスがいい「4-4-2」システムに変化しました。

コレが何を意味するかというと・・・

そうです！私がずっとやってきた「右ウイング」のポジションがそもそもないんです！

コレは衝撃でしたね。

「いや・・・え？ないんだけど。。。どーすりゃいいんだ・・・」って状態でした。

普通に考えれば「右サイド」の MF のポジションがいちばん近いんですけど、何を血迷ったか「4-4-2」の「2」の片割れ、つまり CF をやることになったんですね。

(セカンドトップだの1. 5列目だの細かい戦術はなかった。)

いや、ラウールいるじゃん、と。

ただ、ここで大事な事に気づくわけです。

「CFひとり増えてる！」ってことですね。

そうなんです。「4-3-3」の CF ひとりから「4-4-2」の CF ふたりへと、CF のポジションがいくつか増えてるんですね。

「これならラウールと争う必要もないし、結局のところオレはアイツにアシストすりゃいいわけだ。」

なんて事を考えたわけですね。(この時点ではもうストライカーになろうなんて思っておらず、アシストを生きがいとすることに目覚めてた。そして、点取るのはほぼソイツに任せっきりで、点を取る事についてあまり深く考えていなかった。)

かなりの楽道家でしたが、それでもこれから楽しくプレー出来るなと思っていました。

ただ・・・ここで大事件が発生します。

なんと！！！！一年の終わりにラウールが転校してしまったのです。。。

はい、キタコレ。

絶望ですね。

「いったい誰が点取るんだ！」と。

先輩がいるうちはまだいいけど、オレらの世代になったら完璧ストライカー不在やん、と。

ココで、ある人物に白羽の矢が立ちます。

そう、オレです。

いやいやいや。。

なんてこった、と。

どうすりゃいいんだ、と思いました。

全く予期せぬストライカーの移籍（転校）。

コレによって私は「アシストする生きがい」を失い、「点を取らなければいけないプレッシャー」を受けることとなりました。ラウールちょっと恨みました。

何が大変かって、「点の取り方」がわからない、ってことです。

そこからは苦難の連続でした。

もちろん、ずっと FW をやってきたので「点を取った事」はあるんですが、それでもラウールに比べれば圧倒的に得点力は落ちます。チームも混迷を極めました。

一年生大会の時には圧倒出来ていたはずの地区大会も、二年生でやった新人戦では敗戦。

残すは三年生の中体連のみとなりました。

しかし、不思議なことに中体連に向けて苦労が少しずつ実を結ぶ実感がありました。

練習試合や地域で行われる大会などで結果が出るようになってきたのです。

今考えると理由はいろいろありました。

「もともとチーム全体のポテンシャルが高かった」とか「昔は強かったというプライド」  
とか「中体連が終わればもうこのチームで戦う事が出来ないという意識による団結」とか。

他にもいろいろあるとは思いますが、とにかくにもチームはまとまっていきました。

私もラウルには程遠いとはいえ、得点力も向上し、背番号も「10番」を任されるよう  
になり（今までずっと11番）、一段と責任感を持つようになりました。

そして迎えた中体連。

地区大会では決勝戦で新人戦の時に苦渋を舐めた相手に対して「1-0」で勝利、県大会  
への切符をつかむ事が出来ました。（ちなみに得点者はオレじゃない。泣）

迎えた県大会は、各地区から勝ち上がってきた16チームによるトーナメント制です。

一回戦は「3-1」での逆転勝利。（ココでもオレは決めれてない。泣 いいんです、いい  
んです。チームが勝てればいいんです。ウチのチームはトータルフットボールなんです。）

そして迎えた準々決勝、なんと相手はラウルの移籍した中学校でした。  
（しかもラウルはボランチになってる。。。上手いやつってどこでも出来るんですねー。）

「絶対に負けられない戦いがそこにはある」、そう思いました。

なぜなら、相手はそんなに強い中学校ではなかったんですよ。ラウルが来るまでは。。。  
なんたる影響力なんだと。。。コレで負けたとなれば、もう気持ち的にはラウルひとりに  
負けた感じになります。

あと個人的には「お前のせいでオレは余計なプレッシャーと戦う羽目になった。」という  
なんとも見当違いな個人的な恨みすらもぶつけようとしていた気がします。（中三病）

試合が始まりました。もうね、完全に乱打戦です。打ち合いです。シーソーゲームです。

後半の半分が過ぎたところまででスコアは「3-2」の1点リードの状況。

ただこのまま逃げ切れとは思わない。



なんてたってアーイドル。。

なんてたって相手はラウルです。ココゾという時に決めてくるようなヤツです。

味方の時はこれほど頼もしくていいヤツもいないと思っていましたが、敵になるとこれほどまでにおっかなくて嫌なヤツだとは思いませんでした。。

そんな時、私に千載一遇のチャンスが！

司令塔からの決定的なスルーパス！

コレを決めなきゃ漢じゃねえ！

．．．．．決めました！！

価千金のゴールです！！ひゃっはあああ

「同点ゴール」でもなければ「勝ち越し」でも「逆転」でもありません。

ただの「追加点」です。

でもその「ゴール」の重要性は「味方の反応」でわかりました。

決めた後のオレを祝福するために、GK（ゴールキーパー）までもがわざわざ駆け寄ってくれたんですね。

あの光景は忘れないと思います。

コレが「ストライカー」とか「背番号10」の重みなのかな、となんとなくその時に感じた事を覚えています。

すごく幸せな瞬間でした。

結果的に「4-2」で勝利することが出来ました。

凄く嬉しかったのを覚えています。

まあ、結局は次の準決勝で負けちゃって東北大会に進む事は出来なかったんですけどね。

コレで中体連、ひいては今までずっとやってきた仲間たちとのサッカーが終わりました。

でもサッカーは辞めません。次は高校です。

中学～高校

中体連が終わった私は、「地区選抜」に呼ばれる事が出来ました。

まあ、怪我してたのと期末試験があったのとで参加は出来なかったんですけどね。

で、高校もサッカー第一で選ぼうと考えていた私ですが、自分の求めている高校からは推薦を貰う事が出来ませんでした。

まあそれでも行こうとしたんですけどね。

一般でもレギュラー勝ち取ってやる、という気持ちで。

でもそこに歯止めを掛ける人物がいました。

そう、親父です。

出ました！久々の登場。まいふぁーぎー。

大事なところでひょっこり顔を出してきます。

親父は私を諭します。

「頼むから、進学校を受験してくれ」と。

そりゃそうですよね。

地区選抜レベルの人間がサッカーの強豪校（山形レベル）に行ったところで何になる？と。

それだったら進学校に行って少しでも将来の選択肢の幅を広げてあげよう、と考えるのが普通の、そして良心的な親の考えです。(私も学力的には進学校を受験出来る程度はあった。)

でもまあ反発しますよね。

「オレはサッカーがしたいんだ！」と。

まあ結果親父には敵いません。親父の説得力ハンパないです。(強引き含め)

結果私は進学校を受験することになります。

理解塾なんていう斬新な塾に通いもしました。

で、結果。

見事に落ちます。

個人的にはサッカーに集中したいという思いがあったので、そこまで落ち込んだりはしませんでした。

でもやっぱそれを親に伝えた時のあの顔を忘れる事は出来ません。

まあ、なんやかんやで高校進学です。

## 高校時代

進学校に落ちた私は、スベリ止めの私立高校に入学します。

ただ、ココはサッカーの強豪校だったんですよ。(あくまで山形レベル)

私が入学する前年は県でベスト4まで行きましたし、その年のチームからプロになった選手もいましたしね。

ただ、現実はそんなに甘くないです。。

入ってみればなんてことはない、その「世代」が強かったってだけでした。

もちろん、上手い人はたくさんいましたし、チームとしてもそれなりに強かったです。

ただ、私の「世代」は正直「ハズレ」でした。(コーチからも卒業後に言われた。なんてコーチだ！)

いや、お前ら推薦でこの高校来たんじゃないのかよと。

コレならオレの中学のヤツらの方が全然上手いわーん。

みたいな感じでした。

まあ、コイツは上手いな、ってのがひとりだけいたんですけどね。

ソイツとツートップ(FW)でコンビ組めたら楽しいな、なんて思っていたらそいつサッカーでSB(サイドバック)にコンバートされましたからね。なんてこった。裏切り者め。

暗黒の高校時代の幕開けです。

最初に、高校時代いちばんの衝撃をお伝えしておきます。

それはある日のミニゲームでのことでした。。。

私がドリブルしてシュートまで持っていったプレーの後、コーチがこんな事を言いました。

「みんな今のプレー見たか？タカヨシはボールを貰う前から次にどんなプレーをするかイメージしていた。だからシュートまで持っていった。みんなもイメージしながらプレーするようにしろよー。」と。

オレ「は？」

いやいや、わざわざ言うような事じゃないでしょそれ。え？みんなやってないの？

コレで強豪校？

そんな風に思いました。

なぜなら私は今までそれが「出来て当たり前」と思っていたからです。

ましてやそんなことをわざわざ意識してプレーしたことなんてないよ、と。

それがみんなは出来ていない。

「マジかよ。」と思いました。

いや、初心者の人に教えるのならわかります。

「プレーする時は準備の段階からイメージしておくことが大事ですよ！」と。

でもここにいるのは初心者じゃありません。

むしろ大体の人が「推薦組」なわけです。しかも一応強豪校の。

ましてや私は「一般組」なわけです。(進学校を受験したからですが、そもそもこの高校から推薦自体貰っていませんでした。)

こんなレベルから教えられてるヤツらがこれからの3年間で他の高校、ましてや強豪校なんかには勝てる訳ねえじゃん。

そんな風に思いました。

そして、そんな私に更に追い打ちを掛ける出来事が起きました。

「親父の死」です。

私の最大の理解者であり、人生の道を示してくれていた親父が高一の夏休みに死にました。

もうね、何が何だかわからなかったです。

その当時の事はほとんど覚えていません。

夏休みということもあって、部活はずっと活動していたんですが、私は一ヶ月の間、部活を休みました。

すみません、急に暗い話をしてしまって。

でもこの出来事は私の人生において最大の出来事であり、その後の人生に多大な影響を及ぼした出来事なので、書かないわけにはいきませんでした。

こうして私は、「最大の理解者」を失い、「とても強豪とは呼べない環境」で戦わなくてはならなくなりました。

気を取り直していきます。

夏休みが明けるのと同時に、私は普通の日常へと戻りました。「高校」と「部活」への復帰です。

ココで私は、中学と高校との違いを痛感させられます。

それは、「戦術」です。

中学に比べ、高校ではより「戦術」に重きが置かれます。

「組織」で戦わないと勝てないようになってきたわけです。

そしてウチは「ニセ強豪」です。

また、時代的な流れ（プレッシングサッカー）も相まって、とにかくまずは「失点しない事」に監督やコーチは力を入れます。

まあ「戦術」における「ベース」なので仕方のない事ではありますが。  
（結果この考えが最後まで尾を引っ張る事になりますが、それはまた後程。）

すると、何が起きるか？

「FWも守備しろよ」って事ですね。

まあ今のサッカーを見てる人からすれば当然の事なのですが、当時の私はFWの役割は「攻撃に貢献する事だ！」とっていましたし、ましてや小・中学校ではそこまで「守備」というものを求められてはいませんでした。（分業制+チームが強かった）

なので私にとってはかなり衝撃でした。

守備嫌いですしね。

でもやらなければ試合には出してもらえません。

守備しないと失点しやすくなりますからね。当たり前ですね。

加えて言うと、チーム事情もあり、選手の「選出基準」が「攻撃<守備」でした。

つまり、たとえFWであっても「攻撃力のある選手」よりも「守備力のある選手」が試合に出してもらえたわけです。（まあ攻撃力が飛び抜けていたわけでもないですしね。）

オレからすれば「FWなのに!？」って感じでした。

高一ですしね。まだまだ青臭いガキンちょです。

でもしゃーないです。試合に出れなければなんにも出来ませんから。

そんなわけで、私の高一は「守備力強化」の一年となりました。

コレは相当にフラストレーションが溜まりました。

「攻撃の選手」なのに「守備ばかり」しなきゃいけないわけですからね。

全然楽しくないわけです。オレはなんのためにいるんだよ、と。

それに「攻撃力」を上げなければ、たとえいくら失点を防げたとしても点を取る事は出来ないわけです。

そして当然、親父もいません。

「最大の理解者」であった親父は、素人でしたがいろいろと勉強してくれて、たくさんのアドバイスをしてくれていました。(効果的であったかは別として)

なので私も何かあればまず親父に相談していました。(怒られた記憶ばかりですが。)

そんな親父がいないと、相談する相手もいません。

また、たとえチームメイトなどに相談しても、やっぱり親父とは違います。

監督やコーチにしても、チーム全体を見なければいけないので、やっぱり親父ほどに自分の視点に近いアドバイスも貰う事は出来ません。

そんなこんなで「攻撃の選手」なのに「守備力強化」というなんとも言えないジレンマを解決する事も出来ずに私は高校生活の最初の一年を過ごすことになりました。

そうして迎えた高校生活二年目。

新チームということもあり、私はちよくちよく試合にも出してもらえるようになりました。

また、チームとしても「守備戦術」に関する指導を受け続けてきた事で、安定するようにもなってきました。

ただ、やっぱりそれでも失点を完璧に防げるわけではありません。



そして、チームとしての「攻撃戦術」の練習もあまりしてきてはいません。

すると何が起きるかというと、

「負けない試合」

「負けてしまう試合」

「なんとか点を取る事が出来て勝てる試合」

これらいずれかの試合をすることしか出来ないチーム、の完成です。

これじゃあ勝てません。

なぜなら得点出来る試合は、「相手が明らかに格下」のチームか「ラッキーによる得点」の試合しかないわけですから。

コレでは自分のチームと同格以上のチームが相手の試合では、「負けない」事は出来ても、「ラッキーによる得点」でしか勝つ事は出来ないわけです。

コレは悲惨です。

そもそも得点の前に「攻撃」すら満足に出来ませんでしたから。

「攻撃の選手」なのに守備に追われてばかりで、たとえボールを奪っても「攻撃の型」がないからチームとして機能しない、そんな試合が続きましたし、実際ほとんど勝てませんでした。

そんな中でたとえ「攻撃力のある選手」がいたとしてもほぼなんの意味もありません。

なぜならボールが減多に来ないし、来てもほぼ「単独突破以外の道がない」からです。

こんなにサッカーが楽しくないと思ったのは初めてでした。

そして、事件が起きます。

高二の秋の新人戦です。

地区大会をなんとか突破した私の高校は、県大会にコマを進める事が出来ました。

そして、なんと強豪校と当たる事なく準決勝まで勝ち進む事が出来ました。

(完全にクジ運ラッキー。)

そこで迎えた準決勝。(ココで勝てれば東北大会、もし負けても三位決定戦で勝利出来れば東北大会)

まず強豪校相手に「0-3」の完敗を喫します。

点取れる気配なんて皆無でしたね、リームーです。

また、いくら守備力を強化したところで強豪相手には無意味でした。リームーです。

まあそれでも切り替えます。東北大会への希望はまだありますからね。

迎えた三位決定戦。

相手は伝統的な強豪、というわけではありませんでした。

コレなら勝つチャンスはあるかも、と思いました。

私はスタメンで起用されました。背番号も「10」を貰えました。(ここらへんから「10」に対するこだわりを持った。)

対戦してみた感じは、今まで戦ってきた強豪とは違い、競り合いも激しくなく、また守備に関してもゆるい印象を受けました。

「コレはイケるかも。」と思いました。

でも、実際は全く逆の展開となりました。

「守備のゆるさ」に慣れていなかったのです。

今までは、「攻め込まれる中で少ないチャンスを活かして攻撃」か「格下相手に圧倒的に攻撃」の2パターンでした。

しかし、この時の相手は「同格同士での攻撃の応酬」という試合展開でした。

初めてのパターンです。

「攻め込まれたのにいざ攻撃に移ると相手の守備がゆるい！」

この試合展開に対応するだけの「知識」も「経験」も自分にはなかったのです。

今までの、「なんとか攻撃」のパターンだと「選択肢」が少なく、やるべき事が限られていたため、判断を迷う事なくプレーする事が出来ました。

ただ、この試合に限っては、「なんとか攻撃」のパターンで「相手の守備がゆるい」ため、「選択肢」がいくつもあったのです。

つまり、判断に迷いが生じたのです。

加えて「攻撃の型」もそんなに多くないチームです。

そんな中、「シュートすべきかドリブルすべきか、それともパスか、パスなら誰に出せばベストなのか。」

そんな風に数多くの選択肢があり、決断に時間が掛かりました。

また、ココがいちばんの問題なのですが、私は「優柔不断」です。

この「優柔不断」さが決断の遅さに拍車をかけました。

結果、私はなにひとつチームに貢献することも出来ず、前半の途中で交代。

チームも「1-4」の大敗を喫しました。

もうね、号泣です。自分に対する不甲斐なさでいっぱいになりました。

ただ、ホントの問題はココからでした。

すぐに切り替えてチームのために「貢献」出来るよう頑張る事が出来ればよかったのですが、私は道を踏み外しました。(あ、別に不良になったとかじゃないですよ。)

「チームや監督、コーチに不満があった」のをいい事に、私は「自分の不甲斐なさ」を「自分以外の人のせい」にしたのです。

「監督やコーチがもっとオレの事を理解してくれてればこんな事にならずに済んだのに」

「チームメイトがもっと上手ければこんな状況に陥る事もなかったのに」

そんな風に考え、私はしばらくやる気のないプレーを続けていました。

そうして私はスタメンを外されるようになりました。

全ては自分の責任です。

後悔しても先に立ちません。

親父に相談出来ていたらなあ、なんて思ったりもしました。

でも全部考えた所で意味ないんですよ。

現実を変える事は出来ないし、結局全ては自分の行動次第ですしね。

で、気づいた所でもう後の祭りです。

しばらくして私は「こんなじゃダメだ、ちゃんとやろう」とやっどこさ思い立ちました。  
(チーム事情は変わらないですし、自分はずっと攻撃したい、とは思ったままでしたが。)

でも、その時は既に後輩が私のポジションを奪い、チーム内での地位を確立していました。

「信頼を落とすのはカンタンだけど、取り戻すのは時間が掛かる。」

この事を私は身を持って体感しました。

しかも、たとえ信頼を取り戻したところで、そこには「私がやる気を無くしている間に信頼を勝ち取り、経験を積み、地位を確立している後輩」がいるわけです。

いくらやる気を取り戻したとはいえ、その後輩よりも上に行くのはカンタンではありませんし、何より私は「チーム事情」を消化しきる事が出来ませんでした。

消化して、そこに自分をはめ込むと「個性が死んじゃう」と思っていたんですね。

しかも後輩は後輩で上手いですし、トータルで見ればたぶんチームにより貢献出来る人材だったと思います。

そして、私が圧倒的に攻撃力で勝っているわけでもない。

結局、私はFWの3番手としてその後をずっと過ごす事になりました。

こうして、私の高校時代は幕を閉じ、またサッカー人生にも幕を閉じる事となりました。

なんとも中途半端なおトコです。

それでもサッカーは好きなままでした。

そして、大学生活を迎えます。

## 大学時代

私の通っていた高校はエスカレーター式の私立高校でした。

なので、何を考える事もなくエスカレーターに乗ってそのまま大学へと進学しました。

友達も数人進学しましたしね。

ただ、大学でもサッカー部に入ったかという、入りませんでした。

私の進学した大学はマンモス校で、部員もたくさんおり、高校時代大した実績も挙げられなかった私は当然ながら推薦を貰えるはずもなく、推薦で入部してくるような全国のサッカーエリート達との競争に勝てる自信がなかったんですね。

また、明らかに体育会系であるマンモス校のサッカー部で、評価されるかどうかもわからない状況でサッカー漬けの毎日を送るよりも、キャンパスライフをエンジョイしたいと思う自分がいたというのも、正直な気持ちでした。

すいません、完全なゆとり世代の典型です。

まあ、さらに正直な気持ちを言っちゃうと、高校サッカーの三年間で、サッカーが楽しいと思えなくなってしまっていたんですね。

完全なヘタレ野郎です。

でもそれがその時の正直な私の気持ちでした。

そんな時に出会ったのが「フットサル」でした。

高校から一緒に進学した友達の誘いで、私たちは仲間内で非公認のフットサルサークルを結成しました。

メンバーは初心者と経験者が半々の総勢13名の小さなサークルでした。

趣味でやる分には楽しめるかな、と思い参加しました。

活動内容はとてもゆるく、「t h e ・ゆとり世代」といった感じのものでした。

- ① 練習は週に一度か二週に一度、集まった人だけでテキストを楽しむ。
- ② そして大体月イチペースで近くのフットサルコートが開催している大会に参加する。

という感じです。

あとはもう完全に友達なので、飲み会をしたりたまにドライブに出掛けたり、ウイイレしたり、みたいな感じでした。

まあ、今となってはこのくらいゆるかったからこそ続く事が出来たのかな、とも思います。

特にサークル内で摩擦が起こったりという事はありませんでしたが、大会に出るからにはやっぱり勝ちたいです。なので、基本的にはバランスよくメンバーを選び、どうしても勝ちたい時や相手が強すぎる時などは経験者で固めたり、なんて事をしてました。

メンバーみんなに理解があったんですね。

凄くいいサークルだったと思います。

途中でサークルのユニフォームも揃えました。

もちろん私の背番号は希望通り「10」をゲットです。ナンバーテンです。

プロフィールの写真はその時のユニフォームです。

少し話が逸れましたが、やっぱりみんなでフットサルを楽しむ為には、初心者の人たちにもある程度上手くなってもらえた方がいいわけです。チームの底上げですね。

なので、練習・大会問わず、みんなでプレーしている時にはコミュニケーションを取り、アドバイスなんかもしたりしてました。

もちろん、「フットサルを楽しむ」ということを大前提として。

部活のようにあまりにもガチでやってしまうとモチベーションにも関わってきますよね。

そこらへんは凄く注意してやってみました。

まあ、みんななかなか向上心のあるヤツらだったので、そこまで意識することもなかったですが。

みんななんだかんだ言ってフットサルが好きだったんですね。

で、結局三年くらいは割としっかりと活動していたと思います。

初心者のみんなも驚く程上手く！とまでは言いませんが、フットサルをするにあたっての戦力として計算が立つレベルまでにはプレー出来るようになっていました。

実働的には「みっちり2～3ヶ月」くらいの日数だったと思います。

「継続は力なり」ですね。

経験の積み重ねは人を間違いなく成長させてくれると実感する事が出来ました。

楽しい大学時代を過ごせた理由のひとつに、この「フットサルサークル」があった事は間違いありません。今となってはなかなか会うことは出来ませんが、今でも感謝しています。

このように、「サッカーをやってきた経験」と「フットサルサークルで初心者にアドバイスしてきた経験」が、私がこのブログをつくろうと思った原点であり、財産です。

なので、これまで私が積み重ねてきた「経験」を基に、フットサル初心者の方が上手くなるために有益な情報を発信していきたいと思ひますし、このブログがきっかけでフットサルがより好きになったり、フットサルにハマったりしてもらえれば、これほど嬉しい事はありません。

また、「質問や相談」も大歓迎です！

ブログ内に「質問・相談フォーム」を設置していますので、お気軽にご連絡ください！

出来る限り、出来る限り迅速に変身させていただきます。



では、最後にサッカー・フットサルに関する私の好みをお伝えしていこうと思います。

共感していただけると嬉しいですし、共感出来なくても、よりサッカーやフットサルが好きになるきっかけとなっていただければ嬉しいです。

### 私の好きなサッカー選手

R・バッジョ、ロナウド（元ブラジル代表）、グティ、レコバ、ルイ・コスタ、アイマール、ストイコビッチ、エジル、モドリッチ、ジダン、ロナウジーニョ、バレロン、デ・ラ・ペーニャ、トッティ、リケルメ、ルーニー

ここらへんですかね。

基本「10番」タイプの選手（ファンタジスタ系）が好きです。

ロナウド（元ブラジル代表）は別格です。

彼は私が中学時代にストライカーにならなきゃ！と焦っていた時の指標となった選手です。

彼のプレーは飽きる程見ました。

特に好きなのはバルサ時代のゴリゴリドリブルとインテル時代のミラノダービーでのループシュートですね。

ちなみにR・バッジョのインテル時代のローマ戦のループシュートとブレシア時代のプレー全般も好きです。

### 好きなクラブチーム

レアル・マドリード、アスレティック・ビルバオ、モンテディオ山形

基本的には完全に「マドリディスタ」です。

なのでバルサの選手は基本好きな選手にも選びません。（ロナウドとロナウジーニョは別。ロナウジーニョは高校時代凄く影響を受けた。あ、あとデ・ラ・ペーニャも。ロナウドイチョシのパス。あ！リケルメもいた。。けっこーいましたね。笑）

そして、アスレティック・ビルバオは「歴史」と「クラブの理念」が好きです。

簡単に説明すると、ビルバオはバスク地方出身の選手でしかチームを構成しないんですよ。

で、歴史的に見て100年以上続いているリーガ・エスパニョーラにおいて、2部降格を味わったことのない3チームの内のひとつなんです。

そして、ビルバオ以外の2チームが世界的なメガクラブである「リアル・マドリード」と「バルセロナ」である事を考えると、クラブの規模的にも、また世界的な流れとして国外の助っ人的な選手をチームに加えるのが当たり前の現代サッカー界においても、この実績の凄さは計り知れないものがあります。

あとは「戦うバスクの戦士たち」であるということですね。

彼らの試合を見ると奮い立つものがあります。常に全力で挑んでいく姿勢、諦めることを知らない彼らの姿勢は感動モノです。

あとは「モンテディオ山形」。

まあ、これは完全にただ地元だからってだけなんですけどね。

頻度はまちまちですが、小学生の頃からずっとモンテのホームの試合はスタジアムに足を運んで観てきました。

ずーっと変わらない「モンテクオリティ」がそこにはあります。

それは、「勝ちきれない」ということです。

数ある「勝ちきれないパターン」の中でも、特にモンテが得意としているのが、「アディショナルタイムに失点して引き分け」のパターンです。王道です。

モンテファンの中では最早常識の範疇です。ある意味感動モノです。

サッカーにはいろいろな楽しみ方があります。

楽しめるようになってしまった自分がちょっぴり悲しいです。

そして凄いのが、監督も変われば選手も変わり、ましてやチームを構成しているほとんどの選手は県外出身者だという事です。

それでも変わる事のない「モンテクオリティ」。流石の一言です。

J1に上がった事もありますが、それはあの「豊田陽平」がいたからです。今や日本代表候補までになっている選手ですからね。(残念ながら2014年W杯メンバーには選ばれませんでした。)

「個の力」で得点を重ねてくれた彼のおかげで、モンテは一瞬だけ変わりました。

ありがとうトヨグバ。

私はモンテを愛しています。

モンテを一生応援し続けます。

### 好きなマンガ

マンガ大好きです。コレでそのうち一本記事を書こうと思っています。

好きなマンガはいろいろありますが、ココはフットサルに関するブログなので、それに関係したマンガでオススメのものを紹介します。

- ・「GIANT KILLING」(ジャイアント キリング) 2014年5月現在31巻
- ・「ファンタジスタ」(ステラじゃない方) 全25巻
- ・「BE BLUES! ~青になれ~」 2014年5月現在13巻
- ・「ホイッスル」 全24巻
- ・「かっつび一斗」 全46巻、「風飛び一斗」 全26巻 (未完)  
カンタンに紹介すると。。。

### 「GIANT KILLING」

昔クラブを裏切ったとされる ETU (クラブチーム名) の星「達海猛 (タツミー)」が監督として帰ってきた。「タツミー」がいなくなっただけからの ETU は散々たる結果しか残せておらず、就任前のシーズンもなんとか1部残留を果たせたところ。そんな状態の ETU を「タツミー」がどのように監督として率いていくか。

という物語。ココでこのマンガがおもしろいのは、主人公が「監督」であるということです。(普通のサッカーマンガは大体選手が主役。) それに加えて、このマンガではクラブを取り巻く全てのものを描いており (サポーターやフロント、スタッフなど)、内容もかなり濃いです。コレは是非オススメです。

### 「ファンタジスタ」

「坂本轍平」という島育ちの少年の成長物語。「ファンタジスタ」という人種である彼が、様々な環境や摩擦の中で自分を見つめ、自分を信じてより高みを目指して成長していこうともがいていくマンガです。

コレは高校時代はかなり影響を受けたマンガです。続編の「ファンタジスタ ステラ」はあまり好きじゃないですが、コレは是非読んで欲しいオススメのマンガです。

### 「BE BLUES! ~青になれ~」

コレもストーリー的には「ファンタジスタ」と近いものがあります。「一条龍」という少年の成長物語です。

「ファンタジスタ」との最大の違いは、「とても大きな転換点」があるということです。ネタバレになるので詳しくはお伝えしませんが、この転換点はその後の少年の人生に大きな影響を与えます。あくまで私の感覚ですが、このマンガは「ファンタジスタ」に比べ、より「現実的な視点」で描かれているので、お子様のいる方にはよりオススメ出来るマンガだと思います。正直、私も中学生頃にこのマンガがあれば少しはサッカーの見方が変わったかな、と思うほどです。

### 「ホイッスル」

これも上記ふたつのマンガと近いものがあります。ただ、いちばんの違いは「風祭将」という主人公の少年が「へたっぴ」であるということです。

もちろん物語が進むに連れて上手くはなっていくんですけどね。

「諦めない心」が大事なんだな、と改めて感じさせてくれるマンガです。私も中学生の時に大きく影響を受けました。まあ、僅か1～2年で「東京都選抜」に入ってしまうくらいの成長の速さなので、当時はけっこうやっかみましたが。コレもオススメのマンガです。「諦めない心」はいくつになっても大事な部分ですね。

「かっぴー斗」、「風飛び一斗」

コレは完全にコメディです。ただ舞台がサッカーであるというだけです。(笑)  
めっちゃ血が出ますし、喧嘩や事件が絶えません。格闘マンガでもあります。

おもしろかったので挙げてみました。ただ、コレも主人公の「諦めの悪さ」が全面に出ているマンガです。「諦めない心」と「諦めの悪さ」という表現に違いをつくったのは、マンガを読み比べていただければ理解していただけるかと思います。(笑)ただ残念なのが、掲載誌である月間少年ジャンプの廃刊に伴い連載が途中で終了してしまったことです。いちばん盛り上がる試合の手前で終わってしまっているのも、凄く続きが読みたくなります。なので、消化不良を起こしたくないと考えている方は、読まない方がいいと思います。ただ、基本的にはオススメです。おもしろいので。

こんなところですかね。

ここまで読んでいただいた方は、私の「サッカー観」をある程度理解していただけたかと思えます。

カンタンにまとめると、「大好きなのはパスサッカー！」でも「肉弾戦も嫌いじゃないよ」みたいな感じです。

すみません、深い意味はありません。

ちなみに好きなプレーは、「観客すらも騙す・観客を沸かす・魅了するプレー」です。

そういうプレーが出来るよう、常日頃心がけています。

フツーじゃつまらないですからね。

驚きああってこそ「楽しさ」だと思っています。

ただ、大事なのは「基本的な知識や概念」を理解した上で可能なプレーだという事です。

ココ凄く大事です。

「常識を知らないと、非常識にはなれない」のと同じですね。

「基礎を知らないと、魅力的なプレー」は出来ません。

そこは理解した上でやっているつもりです。

このブログでも、フットサルの「基本的な知識や概念」をお伝えしていく中で、たまーに「突発的な何か」を挟んでいきたいと考えていますので、楽しみにしてください。

長くなりましたが、最後までお読みいただき、ありがとうございます。

では、どうぞ、ブログをお楽しみに！

佐藤タカヨシ